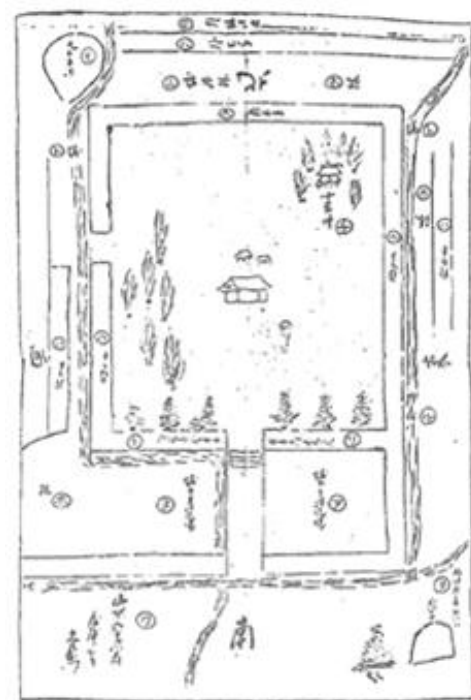


武田信玄公生誕500年記念

武田家の史跡散策 配布資料

於曾屋敷（県指定史跡）



塩ノ山南麓の市街地の武田家に関わる歴史・史跡などを中心にまとめた資料です。

- 開催日時 令和3年9月25日（土）午前8時～12時頃 ※小雨決行
- 集合場所 甲州市役所東側駐車場
- 行程表 甲州市役所（集合）⇒菅田天神社⇒武田信春館跡（千野館）⇒塩山温泉郷⇒向嶽寺
⇒於曾屋敷⇒甲州市役所（解散） ※全行程約6Kmを歩いて散策します。



【武田家系図】



古代

古今和歌集で歌われた「塩ノ山」

山々に囲まれた甲州市にあって、市街地の西側に孤立する山が「塩山」の地名の由来になった塩ノ山である。標高は約 554mを測り、山頂から市内を一望できる。向嶽寺の領地であり、市街地に接しながらも大きな開発がされることなく景観が保全されている。アカマツの天然林としても知られている。

この塩ノ山は古くから甲斐の歌枕として知られており、11世紀前期頃に成立した『能因歌枕』に「シホノ山」、13世紀初頭の『八雲御抄』に「しほの山」等と記録されている。現在知られる塩ノ山を詠い込んだ最も古い歌は『古今和歌集』所載、「志ほの山 差出の磯に 住む千鳥 君が御代をば 八千代とぞなく」である。詠み人知らずであるが、「塩ノ山」と「差出の磯」（山梨市）の情緒は、この歌のイメージから宮廷歌人の憧れの地となり、さらに15世紀前半には、「塩山蒔絵硯箱」のような工芸品の意匠にまで発展した。



■塩ノ山

於曾郷の成り立ち

大化の改新後、東海道の一国として甲斐国が誕生し、山梨・八代・巨摩・都留の4郡が置かれた。正倉院宝物の和銅7年(714)の墨書に「甲斐国山梨郡」と見られるのが最古で、『和名抄』に記される山梨郡10郷のうち、「於曾郷」が現在の字名に残る於曾（上於曾・下於曾）を中心とした地域であったと推定される。

この地に最初に入ってきたのは古代氏族である三枝氏、次いで甲斐源氏の安田義定であった。安田義定の後、鎌倉時代に甲斐源氏である加賀美遠光の子・光経と光俊がこの地に入り、「於曾氏」を名乗った。この於曾氏が屋敷としたのが県の史跡として下於曾に残る於曾屋敷である。

中世

武田家と甲州市

武田家が甲斐国守護として甲州市域に直接関わりを持つようになったのは武田信成・信春親子の代からである。南北朝時代に入り、甲斐守護職としての武田家に異変が起こる。鎌倉時代で確認できる守護職として武田政義がおり、本拠を石和（笛吹市石和町）に置いた（石和流武田氏）。政義は南朝方についていたが、石和で戦死している。一方北朝方についた信時流武田氏があり、信時は安芸の守護に任じられていたので安芸武田氏とも呼ばれている。信時の子信武は政義のあと甲斐守護職に就き、信武の子信成は、康暦2年(1380)拔隊得勝に塩山の地を与え、塩山向嶽寺（塩山上於曾・当時は向嶽庵）の開基として影響力をもった。それまで拠点として使われていた石和（笛吹市）ではなく塩山地域を拠点としたのである。

信成の子信春は千野の慈徳院内に館（別名「千野館」）を構えていたとされており、また、信成の館についても戒名と同じ名の継統院が千野にあったとされることから、信時流武田氏が市域を重要視して

いたことがわかる。さらに、信春の子^{のぶみつ}信満は、天目山栖雲寺（大和町木賊）^{せいうんじ}の開基であるとの寺伝がある。

信成・信春・信満の三代にわたり甲州市との縁がつながっていることは、信成以後当地が重要視されていたことを物語っており、信満の子^{のぶしげ}信重が守護職となって以降は、向嶽寺に対し保護を加えることが武田家の正嫡の証であった。このことが、市域に著名な社寺が保存され、また、武田家滅亡後も徳川家康らによって守られてきた大きな理由である。

散策ポイント解説

①菅田天神社

菅田天神社は上於曾・下於曾地区に氏子を持つ神社である。承和年中（834～848）の勧請といわれ、古来より於曾郷の鎮守であったが、戦国期に入ると於曾氏や武田家との関係を深くした。その一方で、於曾郷の分化とともに上方^{わかみやほちまんぐう}・下方それぞれの鎮守として若宮八幡宮が祀られていき、慶長年中に分村すると両社はそれぞれの村の鎮守と認識された。



■菅田天神社



■小桜韋威鎧 兜、大袖付（国宝）

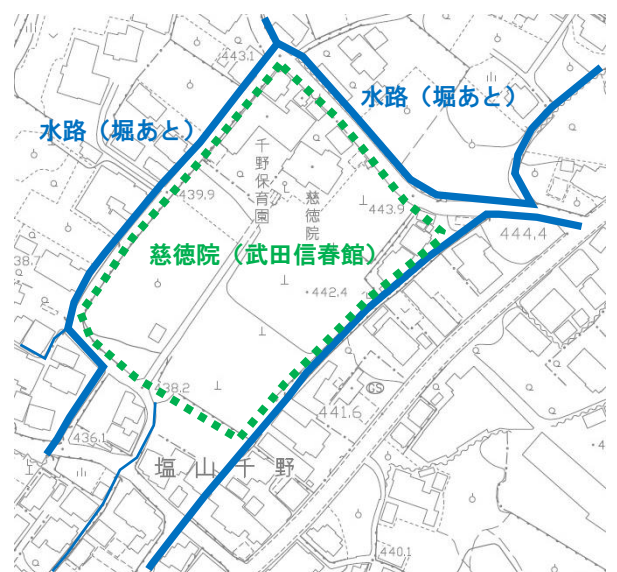
こざくらがわおどしよろいかぶと おおそでつき 小桜韋威鎧 兜、大袖付（国宝）

菅田天神社に伝わる鎧で、武田家の家督相続の証である「御旗・楯無」^{みはた たてなし}の「楯無」にあたる。武田信玄^{きもんちんじゆ}の代には、甲府の鬼門鎮守として菅田天神社に納め、於曾氏が管理をしていた。武田家滅亡の際、家臣が向嶽寺の境内に埋めたが、徳川家康が掘り出し再び菅田天神社に納めたという。

②武田信春館跡（千野館）

塩山千野に臨済宗の慈徳院という寺がある。ここはかつて甲斐守護、武田信春の館あとだと言われている。館は東西に100m、南北に147mという長方形で、周りには水路が巡らされている。土塁のあとも一部に見られ、守護の館らしい趣も多少残している。

館の周辺には「南小路」「前小路」「宿町」「的場」「町屋」「大門」等の地名が残っており、当時、館を中心に町が発展していたことが想像できる。



■慈徳院（塩山千野）の境内は信春の館（緑の点線）で、堀のあとと考えられる水路（青の線）が残っている

③塩山向嶽寺

向嶽寺（塩山上於曾）は山号を塩山といい、臨済宗に 14 派あるうちのひとつの本山で、向嶽寺派を名乗る。境内は南北 300m、東西 170m と広く、北側は塩ノ山に接し、その山裾を利用して名勝指定の庭園が造られている。中心市街地の北西に位置し、塩ノ山を含む広大な境内が開発されることなく保存されている。

向嶽寺の前身である草庵向嶽庵の開基は**武田信成**^{のぶしげ}で、開山抜隊得勝の語録に「当国主武田刑部法光塩山を寄進す」と記されている。抜隊禅師は永和 4 年（1378）、武蔵国から甲斐国に移住して竹森に草庵（現高森院^{こうしんいん}）を構えるが、彼に師事した宝珠寺（山梨市牧丘町）の昌秀庵主^{しょうしゅうあんじゅ}に塩山への移住を勧請され、信成の寺地寄進を受けて、康暦 2 年（1380）に現在の地へ移った。



■向嶽寺中門（重要文化財）

④秋葉神社^{あきば}

秋葉神社は向嶽寺の境内に祀られている。向嶽寺では応永 32 年（1425）の火災をはじめ大小さまざまな火災が相次いだため、元文 4 年（1739）に静岡県^{さんじやくぼう}の秋葉三尺坊大権現（火伏せの神）を火難消除の願いを込め勧請した。

当初の秋葉神社は塩ノ山の山頂に建てられていたが、明治時代になり山が国有地となったため向嶽寺境内に移したという。お堂の中には檜皮葺の旧社殿が安置されている。

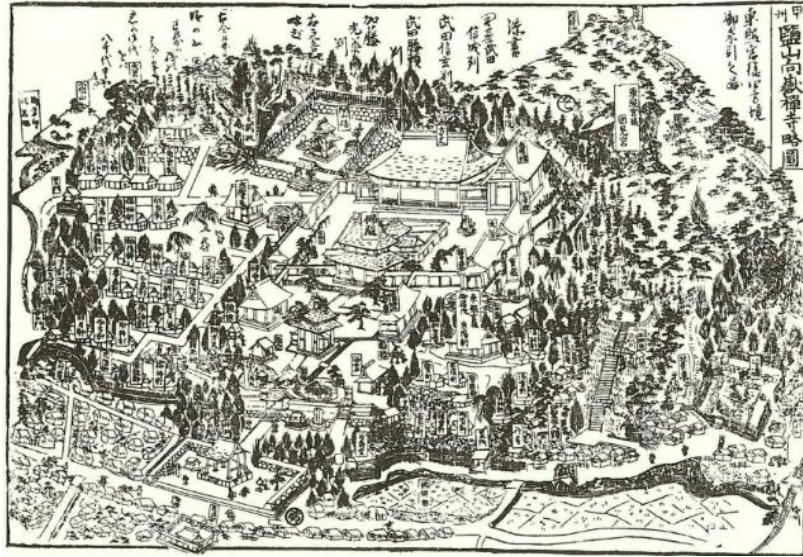
地元の人々から「あきやさん」と親しまれている秋葉神社大祭は、毎年 4 月 18 日に行われる。

⑤塩山温泉と向嶽寺

塩山温泉は塩ノ山の東麓にあり、14 世紀末に向嶽寺を開山した抜隊禅師の発見と伝えられる。享保 9 年（1724）「上於曾村村鑑明細帳」によれば、温泉は向嶽寺の御朱印のうちにあつて、門前 41 軒のうち 16 軒が湯宿を開いていた。浴客も当時年間 1 万人を越え、青梅街道^{おうめ}沿いにあつたため大菩薩越えで訪れる湯治者も多かった。門前を取り仕切るのは向嶽寺で、温泉場における出来事はすべて向嶽寺に届けられて処理されていた。温泉の管理は門前百姓が請負い、また、湯宿銭も向嶽寺の許可を得て定めていた。

『甲斐国志』山川部には、「温泉、塩山ノ寺門ノ東ニテ青梅路ノ傍ニ在リ微温ナリ八九月ノ頃脾胃虚冷ノ人入浴ス又婦人無子モノ夫婦同浴スレハ則チ子アリ若シ得サレバ明年モ亦如是ス三年ヲ過ギズシテ必ズ驗アリト云」とあり、冷泉だったため浴客は夏秋に多く、江戸期を通じて薬効がある温泉として有名であった。同書向嶽寺の条にも「薬泉 一基東門ノ前ニ在リ」と記され、「薬泉」との表記から、もともとは向嶽寺が大衆のために施していたものと思われる。

明治 36 年（1903）の中央線の開通と時を同じくして、塩山温泉は向嶽寺の管理から離れ、民間で経営されるようになった。



■ 甲州鹽山向嶽寺略図（享保年間）

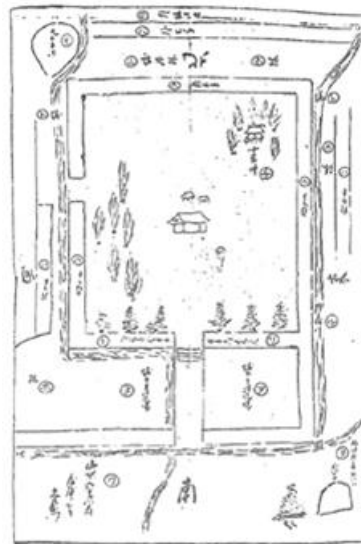
⑥ 於曾屋敷（県指定史跡）

於曾屋敷は東西 112m、南北 153m で、四方を土塁で巡らせている。土塁の高さは約 3.0m、上部の幅は 1.6m、底部の幅は 2.7m ある。また、於曾屋敷のはていた小字は旗板といい、土塁の上に板塀が設けられていたと考えられる。

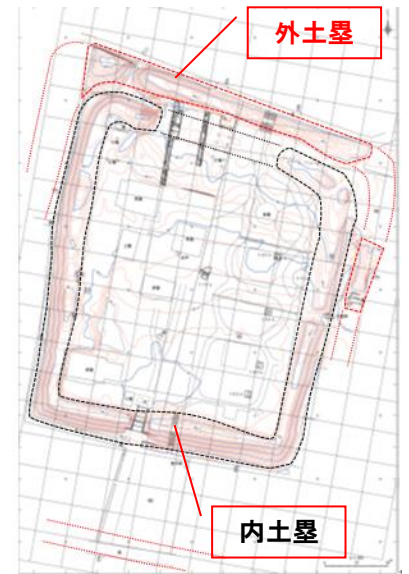
現在残る土塁は、南・東・西辺が内土塁で、北辺は外土塁である。平成 27 年度の発掘調査で、削平された北辺内土塁の痕跡が検出されている。土塁に囲まれた東半分が市に寄付され、南辺内土塁と外土塁（現存せず）との間の土地とともに市民の憩いの広場として利用されている。



■ 於曾屋敷（県指定史跡）



■ 江戸後期の於曾屋敷絵図



■ 於曾屋敷の平面図

部分的に二重土塁が残

⑦ 金山衆屋敷群

下於曾には、甲斐源氏かがみとおみつ加賀美遠光のみつね光経とみつとし光俊が屋敷とした於曾屋敷と、黒川金山くろかわきんざんに関する寺院や金山衆かなやましゅうの居宅跡が残る。

黒川金山は塩山上萩原の字萩原山にあり、16 世紀前半に最盛期を迎え、17 世紀中頃に終焉を迎えた金山である。最盛期には鉾山付近の谷に沿って鉾山町を形成し、標高 1,300m の山中にありながら、「黒

川千軒」と呼ばれるほどのにぎわいをみせた。近接して寺屋敷という地名が残り、かつて寺院がここに存在していた。黒川千軒の界隅から後に別の場所に移転した寺院として、一之瀬高橋に黒川山金鶏寺、赤尾に永久山法蓮寺、そして下於曾に金光山妙善寺と地宝山正念寺がある。

下於曾から熊野にかけて多数の金山衆がこの一帯に本拠をおき、館を構えていた。現在でも田辺氏屋敷や風間氏屋敷（現甲斐ワイナリー・登録有形文化財）には土墨や地割が残っているほか、田辺家にはおおくぼながやす大久保長安の文書など金山に関する文書もあり、当時の様子が伝わってくる。

⑧季候町と塩山温泉の町並み

明治 36 年（1903）鉄道開通と塩山駅開業に伴い、駅の予定地の北に隣接した広大な私有地を、なかむら中村季候きこうがいち早く市街地として開発した。現在の名称は塩山上於曾の町屋であるが、地域住民は現在でもその辺り一帯を「きこうまち季候町」と呼んでいる。

季候町は鉄道を契機として形成された町の典型で、1辺 30～50mの正方形または長方形に区画し宅地とした。季候町には青梅街道北線が通り、もともと街道に沿って人家があったが、鉄道開通以降は通りの両側に短冊状に地割された商店が並び、娯楽施設は塩山駅と塩山温泉の間にある季候町と中央通りに集中した。現在でも飯島家長屋門や荒木薬局、塩山シネマなど、当時の季候町の様子を伝える建造物が残っている。

中央線の開通後の塩山温泉は、鉄道に乗って遠近の客が集まったほか、塩山駅周辺こうゆうかんのにぎわいにより繁盛した。現在でも 6 軒の温泉旅館が営業しており、明治 36 年創業の廣友館と中村屋旅館は当時の面影が残る建物で営業している。



■飯島家住宅長屋門
（登録有形文化財）



■荒木薬局



■塩山シネマ



■中央区区民会館（旧千野学校校舎）
（登録有形文化財）



■廣友館



■中村屋旅館本館
（登録有形文化財）

